風土記の丘の花だより298

今、そしてこれから見られる植物（2025年11月29日）

　クマ騒動もおさまり、風土記の丘に日常が戻りました。気がつけば山はすっかり秋の色になっています。大池に何十羽という数のカワウの群れが入り、毎朝さかんに魚を追っています。しばらく見ていると、魚をくわえて上がってきます。そんな瞬間を観察するのもおもしろいですよ。

　安藤塚や万葉植物園のイロハカエデがきれいに色づいています。これをご覧いただく頃が最もきれいかもしれませんね。写真は 26 日に万葉植物園で撮ったものです。よく「モミジとカエデはどこが違うんだ」と聞かれます。モミジは漢字で「紅葉」と書くくらいで、ハゼノキやツタなど赤く色づく木の総称です。カエデはその中の一つです。でも、今では、カエデをモミジということが一般的になっていますね。カエデは昔「かへるで」と呼ばれ、葉の形が蛙の手に似ている事が語源となっています。

　真っ黄色に色づいた美しいイチョウの写真を載せようと思いましたが、時期的にこの写真にしました。イチョウは今ではどこででも見られるお馴染みの木ですが元は中国原産で、古い時代に日本に持ち込まれました。ご承知のように雌雄があり、雌株には銀杏ができます。果皮は悪臭を放ちますが、きちんと処理すればおいしくいただけます。西日を浴びたイチョウを見ると、与謝野晶子の「金色のちひさき鳥のかたちして銀杏ちるなり夕日の岡に」を思い浮かべます。

　谷山家住宅と船屋の間辺りでハマヒサカキの花が咲いています。「海浜に生えるヒサカキ・　びしゃこ」という意味の名前です。お墓に供えるヒサカキ・びしゃこより葉が丸まっていて、艶があり硬めです。これは強い日差しを受ける海辺の環境に適応したものです。ヒサカキと同じく、花には独特の香りがあるので、好き嫌いが分かれそうですね。この木にも雌雄があり、写真は雌株です。ですから、花は雌花ということになります。中に小さな雌しべがあります。

　園路沿いや、植え込みの下など、あちらこちらでヤブコウジの赤い実が見られます。まるでサクランボみたいですが、５ミリほどの小ささです。葉の緑と赤い実のコントラストがとてもきれいですね。花は小さく余り目立ちませんが、花の少ない季節にこの実はとてもよく目立ちます。万葉の昔は「山橘・やまたちばな」と呼ばれ、大伴家持（おおとものやかもち）の　「この雪の　け残る時に　いざ行かな　山橘の実の照るも見む」　という歌は有名です。緑と赤、更に雪の白という色彩の鮮やかさが目に浮かびますね。　　松下